



第36号(2025年 冬号)
発行日 2025年2月28日
信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession



教職支援センター ニュースレター

巻頭言



【 森信三先生著『修身教授録』に学ぶ 】

森信三先生の『修身教授録』は、昭和11年から3年間にわたり天王寺師範学校で講義された内容を記録したものです。その中でも、第8講「気品」には次のような一節があります。

「気品は、人間の値打ちのすべてを言い表すと言ってもよいでしょう。気品は、ある意味では、全人格の結晶だと言うこともできましょう。気品というものは、その人から発する、いわば内面的な香りとも言うべきもので、ここぞと、形の上について捉えることのできないものです。・気品のある人間になるためには、慎独、すなわち、人間がただ一人いる場合にも、深く己れを慎むということです。・とくに諸君らのように、将来教育者として立つ人には、気品こそ、最も力強い教育的感化の源泉と言うべきでしょう」。

この「教え」は、私自身の学生さんへの指導の在り方や教育の本質、さらには生き方を深く考えさせられるものでした。

前任の大学で、不祥事を起こしたあるサークルの存続が学生委員会で問題となった際、約20名の委員のほぼ全員が廃部を主張。しかし、私は委員長として、その存続を決断しました。ただし、その条件として、森信三先生の『修身教授録』を読む読書会を提案し、学生さん達にも修身の重要性を理解してもらう機会を設けました。



その後、約60名の学生さん達とは3年間にわたり毎月一度の読書会を続け、感想文を通じて率直な意見を共有しました。この取り組みを通じて、学生さん達が学びを深め、自らの行動を見つめ直す姿に感銘を受けました。ある卒業式では、当該学生から感謝の言葉をいただき、委員会での「踏ん張り」が正しい選択だったと改めて感じる事ができました。

森先生はまた、第9講「読書」においてこう述べています。「真に志を抱く人は、昔から分陰を惜しんで書物を貪り読んだものであり、否、読まずにはおれなかったのであります」。「諸君は、差し当たってまず、「一日読まざれば、一日衰える」と覚悟されるがよいでしょう」、と読書を勧める(第9講 読書)。

これからも、学生さん達と共に学び続け、気品と志を育む教育に努めたいと思います。教職員の皆さんにおかれましても、教育の原点に立ち返る機会として、『修身教授録』をぜひ手に取っていただければ幸いです。



安田 弘法(教職支援センター長)

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年以上経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.20 産業編 ～

石川県立翠星高等学校 農業科 教諭

農学部農学生命科学科

生命機能科学コース令和5年度卒業

中西 優花 先生

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

毎日が新鮮であり学びが多いです



私は、今年度の4月から農業高校で教員をしています。普通科の高校を卒業した私には、農業高校での毎日が新鮮であり、新しい学びばかりです。だから、生徒とともに学ぶ日々を送っているといっても過言ではありません。その一部を紹介したいと思います。

先ず、①の写真はロールパン作りの実習の写真です。私自身もロールパンを作ったことはありません。だから、実習助手の先生や同僚の先生の指導を聞きながら、生徒と共にロールパンの作り方を学びました。生徒の中にはパン部に入っている生徒もあり、パンの作り方を熟知している生徒もいます。実習経験が少ない私は、熟知している生徒から教えてもらうこともたくさんあります。そんな過程を通して、生徒の気持ちを理解したり寄り添ったりすることができています。



本校では、その他にも梅シロップやイチゴジャム、ラッキョウ漬け、HACCPクッキーなど、一年を通してたくさんの食品を製造しています。その目的は、高校卒業後、食品関連の産業で即実践力となる生徒を育てるためです。そのため、生徒の中で役割分担を行い、主任の役割となった生徒の指示の下で製造を行う実践演習や、終日食品製造を行う実践演習なども行っています。

②の写真は、農業鑑定競技会に向けた勉強会の写真です。農業高校では、教科の学習や学校農業クラブ活動で得た農業に関する知識・技術の成果を競い合う大会があります。農業高校ならではの大きなイベントの一つであり、生徒一人ひとりがこれまでの頑張り、努力を発揮できる場となります。そのため、多くの先生方が力を入れて生徒と共に大会に向けて準備をしています。私も生徒の支えとなるように一生懸命に教材研究をし、授業に臨んでいます。秋には、石川県産業教育フェアという大きなイベントもあり、大変さは1年を通して続きますが、分からないことは先生にも生徒にも聞きながら一つひとつ学んでいきたい、そんな気持ちで働いています。



最後に、私が受け持っている部活動の写真です。中学からしていたバドミントン部の顧問となり、一緒にバドミントンを楽しみながら指導しています。同僚の先生から、「部活の時の先生は本当に生き生きしているよ」と言われ、自信をもって指導することや自分自身が楽しむことが生徒にもよい影響を与えていると感じています。

これからも、何事も自分自身が楽しく行うことをモットーに、多くの生徒と関わっていきたいと思っています。

ダイキン工業株式会社
テクノロジーイノベーションセンター
分析・評価技術高度化グループ

総合理工学研究科工学専攻 令和元年度修了

新宅 遥 さん



はじめまして。私は大学時代、工学部に所属し、教職課程を学びました。卒業後はダイキン工業株式会社のテクノロジーイノベーションセンターに所属し、技術者として約5年間働いています。主な業務は、空調機器の開発や市場で発生した問題の早期解決、新商品開発の加速に貢献するため、未知な現象に対して新評価技術を確立することです。今日は、企業で働く中で実感した教職課程で学んだ強みを皆様にご紹介させていただきます。

大学時代、私は教職課程を履修し、中高理科の教員免許を取得しました。この経験は現在の仕事で大いに役立っていると感じています。特に新しい知識をわかりやすく伝える方法や技術に興味を持ってもらう話し方に関しては、教職で学んだ生徒にわかりやすく教える方法に通じており、今では自分の強みとして活かしています。

技術的な問題を解決する際、情報をいかにわかりやすく簡潔に相手に伝えるかが重要です。企業で言う相手とは、社内の上司や同僚、社外の共同研究先や海外の現地メンバーです。例えば、上司に取り組みテーマの背景や進捗を説明する際、短時間かつ簡潔さが求められます。そこで要点をまとめ、取り組み内容の面白さや重要性を理解してもらうための工夫は、教職時代に授業計画を作成していた経験をそのまま活かしました。

また、私は他社や大学の先生と一緒に開発テーマに取り組むことが多く、そこで異なる価値観を持つ人々との協力が求められます。その際、教職課程で学んだ多様な価値観や異なる背景を持つ人々とのコミュニケーションの経験があったことで、柔軟な対応力と共感力が生かされ、他社や大学の先生とスムーズな連携が発揮されました。

さらに、教職課程で学んだ海外教育に関する知識も大切です。教育の当たり前が世界では通用しないことに気づき、異文化理解が深まりました。現地メンバーとの協力でも多様性への理解と柔軟な対応力が強みとなり、より良い技術を生み出すための協力関係が築かれています。

最後に、学生の皆さんへ伝えたいことがあります。それは、教職課程は知識の習得だけではなく、柔軟な対応力やコミュニケーションを育む重要な機会です。知識だけでは力を発揮せず、行動と会話で力となり、自身の成長など視野を広げることができます。私が教職課程を履修した理由は、教員になるためではなく、技術をわかりやすく伝える力を養うためでした。結果、その学びが今の仕事にも大いに役立っています。大学時代は、専門分野だけでなく、さまざまなことに興味を持って学び、行動することをお勧めします。

教職支援センター11～2月の動き

- ・第2回長野県総合教育センターとの連絡協議会（11/19）
- ・第2回教職支援センター運営委員会（11/28）
- ・伊那市教育委員会と農学部との懇談（12/3）
- ・初級CST認定審査（12/7）
- ・長野県総合教育センターと理学部の振り返り会（12/10）
- ・松本附属学校園と松本キャンパス教職課程設置学部との連絡会（1/28）
- ・山形村未来塾閉講式（2/22）
- ・長野県立歴史館との連絡協議会（2/28）

地域連携パートナーからのメッセージ



生徒の成長を支える大学生による支援



松本市立清水中学校

教頭 内川 啓

本校は、令和2年から近隣に位置する信州大学、松本県ヶ丘高校と中高大連携を進めています。その一環として、信州大学の学生に、授業での学習支援をお願いしています。今年度は6名に参加していただき、どの学生もとても熱心に支援してくれています。

例えば、メモ帳を片手に持ち、生徒と一緒に問題を解きながら解法を理解した上で分かりやすく説明する姿、学級全体を見渡して、困っている生徒はいないかと気を配る姿、生徒の近くをまわって困っている生徒を積極的に支援する姿が見られます。こうした支援に生徒からは「普段の授業では分からないことを質問しづらいけれど、支援の先生には聞きやすい」、「解き方のポイントを丁寧に示してくれるので、自分でできるようになって嬉しかった」といった感想が寄せられています。

この様子から私が想起したのは、大村はま著『教えるということ』（共文社）にある「仏様の指」の話です。簡潔に紹介すると「あるとき、仏様が道端で荷物を積んだ車を懸命に引く男を見ていた。車がぬかるみにはまり男は苦しんでいたが、仏様がそっと指で触れると車はすぐに動き出した」という内容です。男は仏様の助けに気づくことなく自分の力で抜け出せたと思って車を引いていきましたが、学生の皆さんも自身の経験を踏まえ、生徒が自分の力でできるようになったと実感できるように支援してくれているのだと思います。そのおかげで、生徒の学習意欲は向上しており、力を伸ばすことができています。

学習支援以外にも、学生に合唱部のピアノ伴奏の支援に入っただき、コンクールに向けて充実した練習をすることができました。困ったときの大学生ではないですが、学校の要望に快く協力してくれる学生の皆さんには大変感謝しています。今後も学習支援以外のことも、どんどん協力していただきたいと考えています。一方で、学生からも「現場でこんなことを学びたい」といった要望があれば、対応することも可能です。教育現場での経験を通して、教師の魅力を感じていただくとともに、将来の選択肢を広げるきっかけにしてほしいと思っています。

中学生にとって、年齢が近い大学生から学ぶことは、教師から教わることは違った刺激を得られる貴重な機会となっています。今後も、学生の皆さんの力をお貸しください。どうぞ、よろしくお願いします。



編集後記

本号から編集の担当が変更となりました。教職支援センター助教の橋本萌と申します。2月の初旬には、1年生に対して新年度に向けての教職ガイダンスを行いました。松本キャンパスはもちろん、2年生から各地のキャンパスに移動する学生に対しても、教職の授業を通して、引き続きサポートしていきます。無事に必要単位を取得して、進級する学生たちの様子を見ると、新しい春が、すぐそこに来ているを感じさせます。（広報担当 橋本 萌）



■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 ■TEL: 0263-37-3367 ■MAIL: kyousho@shinshu-u.ac.jp